

# 社会的スキル測定尺度KiSS-18の中国の若者への適用<sup>1) 2)</sup>

毛 新華 (大阪大学大学院人間科学研究科)

近年、中国では、「一人っ子政策」の継続や、IT 技術の進展による間接的なコミュニケーションの増加などの社会事情により、若者の社会的スキルが懸念されるようになった。そこで、若者の社会的スキルを測定し、問題を発見・解決することが急務となる。若者の社会的スキルの測定にあたって、これまで、日本でも、欧米でも多くの社会的スキル尺度が開発されてきたが、中国においては、この種の尺度はまだ開発されていない。そこで、本研究では、中国の若者に適用できる社会的スキル尺度を開発する試みとして、中国と同じ集団文化に属する日本で開発された、若者の社会的スキルを測定する「KiSS-18(Kikuchi's Social Skill Scale・18 項目版)」という尺度が中国で適用できるかどうかを検証した。中国の高校生を対象として検討を行った結果、尺度全体の信頼性がある程度確認できた一方、下位尺度の信頼性は必ずしも高くなかった。また、尺度全体の平均得点、および因子構造に関して、日本における先行研究との間に違いが存在していた。今後、中国文化、中国人の価値観および社会的行動などの特徴を考慮した検討が必要であろう。

キーワード: 社会的スキル、KiSS-18、中国人、尺度開発、文化比較

## 問題

### 中国の若者と社会的スキル

最近、中国において、欧米及び日本と同様、若者の社会的スキルの問題が注目されるようになった。その背景として、2つの社会的な要因が考えられる。

ひとつは、1970年代後半からの「一人っ子政策」が20年以上継続し、現在、都市部においては、一人っ子の若者が多くいることである。一人っ子をめぐる多くの先行研究(e.g., 依田, 1996; 刘, 1988)では、非一人っ子より一人っ子には、社会的スキルに関する問題が多く存在すると指摘されている。もうひとつは、中国のIT技術も進展を遂げ、都市部の若者の間で携帯電話やインターネットが普及し、間接的なメディアによるコミュニケーションが多くなってきたことである。このようなコミュニケーション環境では、若者は間接的なメディア世界に閉じこもりがちになり、現実での人間関係が希薄化すると指摘されている(大坊, 2003)。すなわち、間接的なコミュニケーションの増加は中国の若者の社会的スキルの低下をもたらす可能性がある。このように、中国における若者の社会的スキルが懸念される部分が多くなりつつある。

社会的スキルの高低が円滑な対人関係の形成に影響することは先行研究で明らかにされている(相川, 1992; Lewinsohn, 1974; Segrin & Abramson, 1994)。相川(2000)は社会的スキルが「不足していると、対人関係を開始することも、維持することも、発展させることも難しくなり(p. 209)」、結果的に、孤独感をもたらしたり、うつ病になったり、ストレスを招くと指摘した。一方、社会的スキルは、Argyle(1967)が提示した運動スキル・モデルのように、練習を重ねて上手になるもので、トレーニングすることが可能なものである。しかし、前も

って個人のスキルの程度を把握せず、トレーニングを始めても、本人のスキルレベルと不適合なトレーニングになる危険性がある。その危険性を取り除くために、事前に、社会的スキルを測る尺度を用いて、当人の社会的スキルを客観的に測ることが不可欠の手續きとなる。その意味では、社会的スキル測定尺度は大変重要である。

しかし、中国における社会的スキルに関する研究を見る限り、外国の社会的スキル尺度を用いて研究を行うことが多く、中国のオリジナルな社会的スキル尺度はまだ開発されていないのが現状である。例えば、于(1994)はアメリカの社会的スキルの概念や代表的な尺度を中国に紹介した。また、侯(2002, 2003)は中国人の大学生を対象として、日本のKiSS-18(Kikuchi's Social Skill Scale・18 項目版)という尺度(菊池, 1988)を用いて、一人っ子と非一人っ子とで、社会的スキルの高低を比較した。

このように、中国では、若者用の社会的スキルの測定尺度が必要であるにもかかわらず、オリジナルな尺度が存在しない。そこで、本研究では、中国の若者に適用できる社会的スキル尺度を開発する試みとして、諸外国で開発された既存の尺度における中国の若者への適用可能性を探りたい。

### これまでの社会的スキル尺度

「社会的スキル」は領域によって、定義がさまざまであり、統一的な定義は得られていない(和泉・大坊, 1998a, 1998b)が、社会心理学の領域では、菊池(1988)の「対人関係を円滑に運ぶために役立つスキル」という定義が代表的である。社会的スキルを測る道具としての社会的スキル尺度に関しては、中国にオリジナルな社会的スキル尺度がない状況に対して、中国以

外の諸国では、これまで、多くの測定尺度が開発されてきた。欧米においては、Friedman, Prince, Riggio, & DiMatteo(1980)は感情的コミュニケーション尺度(Affective Communication Test : ACT)を開発し(日本語版は大坊(1991)による)、非言語的な感情の表出性の測定に用いた。Riggio(1986)は情動的表出、社会的表出、情緒的感受性、社会的感受性、情緒的統制、社会的統制、社会的操作の7側面で構成された105項目からなるSSI尺度(Social Skill Inventory)を作成した(日本語版は榎野(1988)による)。Goldstein, Sprafkin, Gershaw, & Klein(1986)は若者のための社会的スキルリストを作成した。

日本においては、堀毛(1987, 1988, 1994)の人あたりのよさ尺度(HT-44)や Takai & Ota(1994)の日本の対人コンピテンス尺度(JICS)や菊池(1988)のKiSS-18などがある。

日本で開発された尺度の中で、特に前述したKiSS-18について詳しく見てみたい。この尺度はGoldstein et al.(1986)のスキルのリストを参考にして、菊池(1988)によって作成されたものであり、若者にとって必要な社会的スキルについて測定するものとなっている。①初歩的なスキル、②高度のスキル、③感情処理のスキル、④攻撃に代るスキル、⑤ストレスを処理するスキル、⑥計画のスキルを含んでいる。菊池(2004)では、この尺度の高い信頼性と妥当性を確認している。また、18項目と項目数が比較的少なく簡便に実施することが可能であるため、開発されて以来、日本では、多くの研究(e.g., 中村, 2000; 津村, 2002など)の中で応用され、若者の社会的スキルの測定に大きく貢献した。相川(2000)は、SST(social skill training)を行う際に、スクリーニング用尺度として優れているとKiSS-18を高く評価した。このように、KiSS-18は日本において、かなりの研究で受け入れられ、そしてポピュラーな社会的スキル測定尺度となっている。

### 社会的スキルと文化

社会的スキルは文化と密接に関連し、各文化において、社会的スキルが特徴的な部分を有する。佐藤(2003)では、日英両国の子どもたちの社会的スキルの比較研究を行い、国際比較を試みる際に留意しなければならない点として、社会的スキルが文化によって異なる可能性のあることを指摘している。また、堀毛(1994)では、欧米と比べて、日本人が他者に対して剥き出しの自己表現をせず、誰にも好ましい印象を与えようとするのが適切な行動と見なされることから、社会的スキルに通文化的側面と文化に固有な側面があると認識し、日本の対人関係に見られる特徴的なスキルのひとつとして、「人あたりのよさ」という概念を取り上げ、人あたりのよさ

尺度(HT-44)を作成した。これと類似した発想によるTakai & Ota(1994)では、自己主張という概念を社会的スキルの例として取り上げて、地理位置、人種、文化などまったく違う日米両国での解釈がかなり異なっていることを明らかにした。このようなことを踏まえて、Takai & Otaは、欧米の翻訳尺度を用いて日本人のスキルを測定すると、測定結果に文化的バイアスが混入する危険性を指摘した。そして、日本人特有の対人文化に視点を置き、日本人のオリジナルな社会的スキルを測定する日本的対人コンピテンス尺度(JICS: Japanese Interpersonal Competence Scales)を開発した。

日本と欧米諸国との間の社会的スキルが相違していることと対照して、日本と中国とは、地理的に近く、人種が同じで、同じく集団文化に属するので、日本人と中国人の社会的スキルは類似しているように思われる。例えば、Hall(1976)の文化とコンテキストに関する理論の中では、欧米諸国の人たちは低コンテキスト文化に位置し、言語的コミュニケーション手段に高く依存する。これに対して、中国と日本の両国はどちらも高コンテキスト文化に属する。高コンテキスト文化に属する者たちは相互作用状況や相手の非言語的行動に内在するさまざまな細かい情報を巧みに受け取り、言葉によらないコミュニケーションができる。また、Triandis(1995)は「個人主義-集団主義」という概念を用いて、世界の国々をカテゴリー化した。その中では、中国と日本のどちらも典型的な集団主義文化に位置づけられた。さらに、水平的集団主義(社会的連帯の感覚や内集団成員との一体感)と垂直的集団主義(内集団に仕える感覚や内集団の利益のために犠牲になる感覚、義務で行う感覚)という分類の仕方でも集団主義文化を細分化した結果、日本は、25%が水平的集団主義、50%が垂直的集団主義で、中国は、30%が水平的集団主義、40%が垂直的集団主義であり、両者はかなり類似している。

ここで、中国人と日本人の社会的スキルが類似しているという命題が正しいとすれば、日本で開発された社会的スキルの尺度は中国においても適用できる可能性が考えられる。日本で開発され、広く応用された社会的スキルは前述したHT-44やJICS、KiSS-18などがある。本研究の若者に適用できる尺度を探るといふねらと照らし合わせて、KiSS-18が最も妥当なものだと考えられる。よって、本研究では、適用可能性を検討する対象尺度として、KiSS-18を取り上げる。

前述した中国の社会的スキルに関する研究の中、于(1994)では、外国の社会的スキルの概念と尺度の紹介にとどまり、侯(2002, 2003)の中国山東省の大学生を対象とする研究では、KiSS-18を用いたが、尺度の使用にとどまり、尺度の中国における適合性を検討しな

った。そこで、これらの研究を踏まえ、本研究では、候の研究と異なる地域で、異なる対象者に、中国の若者の人と関わる価値観との関係を視野に入れながら、KiSS-18の中国における信頼性と妥当性を検討する。

## 方法

**調査対象者・期間** 中国南京市内の4つの高等学校の高校1、2年生747名の生徒を対象として、質問紙調査を行った。そのうち有効回答とみなされた数は741名(男子359名、女子378名、不明4名；平均年齢15.89±0.75歳)であった。調査は2002年9月に実施された。

**質問項目** ①高校生の基本属性として、性別、年齢を回答してもらった。②社会的スキルを測定するための「KiSS-18」(菊池, 1988)に対して、「自分にどれだけあてはまるかを答える」という教示のもとで、「1. いつもできない」から「5. いつもできる」までの5段階評価を求めて1~5点までの得点を与えた。③個人の自己や社会に対する価値観を測定するための「生き方尺度」(板津, 1992)の28項目に対して、「以下の項目はあなたの考えやあなた自身にどのぐらいあてはまるかを答える」という教示のもとで、「1. 全く当てはまらない」から「5. いつも当てはまる」までの5段階評価を求めて1~5点までの得点を与えた。なお、「生き方尺度」は「能動的実践態度」、「自己の創造・開発」、「自他共存」、「こだわりのなさ・執着心のなさ」、「他者尊重」といった自己に関する価値観及び他者との人間関係に関する価値観を含む5つの下位尺度によって構成されている。

**手続き** 質問紙による無記名式の集団一斉調査であった。午後の自習時間を利用して、調査票は担任が配布し、その場で記入させた後回収した。

**尺度の翻訳** 尺度の中国語訳については日本の大学院に在籍し、在日歴4年以上、日本語学習歴7年以上の5人の中国人留学生によって行われた。標準中国語に相当する「普通話」が翻訳文の基準とされた。とりわけ、中国語訳の文についてはニュアンスにも注目することで、極力日本語の原文と同等であるように検討がなされた。また、事前に南京市の高校生(50名、男子27名、女子23名；平均年齢15.67±0.67歳)に対して、KiSS-18の中国語翻訳版の項目を呈示し、それぞれに内容を確認した。その結果、本調査で用いた翻訳尺度は日本語原文と一致したものであることが確認された(項目はAppendixを参照)。

## 結果と考察

### 属性要因との関係

調査で得られたデータについて、性別と年齢に注目

した。性別においては、男子生徒と女子生徒の得点では差がなかった( $t(715) = 0.21, ns$ , Table 1参照)。この結果は報告された日本の高校生を対象とする研究結果と一致する(菊池, 1994)。

一方、回答者の年齢が上昇する(15歳~18歳)につれて、KiSS-18の得点が有意に高くなった( $F(3, 711) = 3.51, p < .05$ )。多重比較(Tukey法)を行った結果、18歳群は15歳群、16歳群、17歳群の三群のいずれより有意に高かった(順に  $p < .01, p < .05, p < .05$ )。菊池(2003)は、「年齢が高くなるにつれて尺度の平均得点は高くなる。中学生より高校生、高校生より大学生の平均得点が高く、成人の平均点はさらに高い。年齢が進むにつれて、このスキルは身についていくようである(p.8)」と述べている。従って、狭い年齢層(15歳~18歳)においてではあるが、本研究では日本と類似した傾向が見出されたといえよう(Table 2)。ただし、本研究の18歳群のサンプル数は少ないことや、各群のサンプル数に偏りが見られたことから、今後の研究で更に検討していく必要がある。

Table 1で示したように、本研究で得た尺度全体の平均得点は男女とも約69点であり、菊池(1994)の研究結果と比べて、男女とも15点ほど高くなっている。さらに、本研究の結果と菊池(1994)の結果について、等分散性を確認したのち、 $t$ 検定を行ったところ、男子生徒間の得点( $t(453) = 18.01, p < .001$ )と女子生徒間の得点( $t(423) = 13.01, p < .001$ )それぞれ有意に異なっている。

中国の高校生がKiSS-18で高得点である背景を探るために、社会的スキルと前述した「生き方尺度」(板津, 1992)の関連について検討してみた。「生き方尺度」の中に、他者との人間関係に関する価値観を示す下位尺度として、「自他共存」、「他者尊重」がある。本研究では、この二つの下位尺度の得点の平均値(21.33±2.51; 13.90±2.34)はそれぞれ板津(1992)の日本の大学生を対象とする研究の得点の平均値(22.04±3.82; 15.03±2.68)と近い(Table 3)。これによって、中国の高校生の人と関わる価値観の水準が日本人の大学生の水準に近いといえよう。

さらに、「自他共存」、「他者尊重」の二つの価値観の下位尺度は高校生の社会的スキルにどのほど関連しているかを明らかにするために、重回帰分析を行った。調整済の $R^2$ 値は0.33であり、「自他共存」と「他者尊重」が共に社会的スキルに影響を与える(それぞれ  $\beta = 0.54, p < .001$ ;  $\beta = 0.12, p < .001$ )という結果が得られた。以上のような結果から、日本の社会的スキル尺度を用いて中国の高校生を測る際、高得点が出た原因の一つとして、中国の高校生が人との関わりに高い

価値を置いていることが考えられる。

Table 1 性別の得点及び先行研究との比較

性別	本研究		t検定	菊池(1994)	
	t検定	n		n	得点
男子	ns	349	18.01***	106	53.98 (7.45)
				68.93 (8.57)	
女子		368		57	53.47 (9.06)
					68.81 (8.15)

( )内は標準偏差

\*\*\*:  $p < .001$

Table 2 年齢別の得点及び先行研究との比較

研究区分	得点結果および傾向			
本研究	15歳(n=220)	16歳(n=366)	17歳(n=115)	18歳(n=14)
	68.30±8.33	68.74±8.20	69.23±8.58	75.64±9.56
菊池(2003)	中学生 < 高校生 < 大学生 < 成人			

Table 3 「生き方」の得点と先行研究との比較

下位尺度	本研究 (高校生)		板津(1992) (大学生)	
	n	得点	n	得点
他者尊重	735	13.90(2.34)	672	15.03(2.68)
自他共存	732	21.33(2.51)	672	22.44(3.82)

( )内は標準偏差

## 因子分析

中国の高校生の KiSS-18 尺度の因子構造を明らかにするために、本研究では、繰り返しのない主因子法を使って、共通性の初期値を 1 として、バリマックス回転を行った(PC-SAS Ver.8.2 による、以降、統計分析については同様)。その結果、固有値 1.0 以上の基準で、4 つの因子が抽出された(Table 4)。第 1 因子では、「やってもらうことをうまく指示できるか」、「人とのトラブルを上手に処理できるか」、「怒っている相手をうまくなだめることができるか」、「気まずい相手と上手に和解できるか」、「人を助けることを、上手にやれるか」、「会話が途切れない方か」という 6 項目から構成されていたため、これを【他人と交際するスキル】因子と命名した。第 2 因子は「仕事上の問題をすぐみつけることができるか」、「やることとその順番を決めることができるか」、「矛盾した話に対して、うまく処理できるか」、「仕事の目標を立てるのに困難を感じない方か」、「こわさ・恐ろしさをうまく処理できるか」、「非難に対するうまい片付けが出来るか」という 6 項目から構成されていたため、これを【自己コントロールスキル】因子と命名した。第 3 因子は「知らない人とすぐ会話が始められるか」、「自己紹介が上手にできるか」、「感情・気持ちを上手に表現できるか」、「人の会話に気軽に参加できるか」の 4 項目から構成されていたため、これを【自己開示スキル】因子と命名した。第 4 因子は「失敗した時すぐに謝ることができるか」、「人と違った考えを持っていても、うまくやってい

けるか」の 2 項目から構成されていたため、これを【適応スキル】因子と命名した。

Cronbach の  $\alpha$  係数については、【他人と交際するスキル】因子は.70、【自己コントロールスキル】因子は.67、【自己開示スキル】因子は.64、【適応スキル】因子は.37 であった。4 つの因子の累積寄与率は 46.46% であった。なお、18 項目全体の  $\alpha$  係数は.83 であり、この数値は菊池(1988)によって検討された KiSS-18 の信頼性係数とほぼ一致していた。

前述した候(2002)によって行われた中国の山東省の大学生 330 名を対象とする研究の中で、KiSS-18 の因子構造を検討した。その結果、6 項目が省かれた後、12 項目から、「対人接触の柔軟性」、「課題達成への自己制御力」、「対人トラブルの解決力」、「問題解決への処理能力」、「課題設定の能力」という 5 つの因子が抽出された。本研究と比較してみると、因子名が異なるが、因子の構成項目において、「対人接触の柔軟性」因子は本研究の【自己開示スキル】因子と、「対人トラブルの解決力」因子は本研究の【適応スキル】因子と同一であった。また、「課題達成への自己制御力」因子と本研究の【他人と交際するスキル】因子、「問題解決への処理能力」因子と本研究の【自己コントロールスキル】因子の構成項目について若干対応しないが、全体としては、類似しているといえる(Table 4)。

候(2002)の調査は本研究の調査地域(山東省 v.s. 南京市)及び調査対象(大学生 v.s. 高校生)と異なるにもかかわらず、類似な因子が抽出されたため、中国の若者は KiSS-18 に対する認識がある程度一定であるといえよう。

前述したように、菊池(1988)の KiSS-18 は 6 つの構成概念から構成された。そこで、本研究で得た因子分析の結果をそれらと比較してみた。その結果、両者の間に、ずいぶん大きなズレが認められた(Figure 1)。具体的に、尺度の当初の構成概念では、スキルが内容(感情処理、ストレス処理、計画など)によって分類されるのに対して、本研究で得た因子では、誰に対してのスキルなのかという方向によって認識されているように推測された。換言すれば、中国の高校生は、社会的スキルを、そのスキルが自分をコントロールする時に使うもの(例えば、自己コントロールスキル因子)なのか、それとも他人と付き合う時に使うもの(他人と交際するスキル因子、自己開示スキル因子)なのかで識別していると考えられる。

本研究の中国の高校生の回答結果からすると、KiSS-18 が作成された当初の構成概念と必ずしも一致していないのではないかと考えられる。

また、18 項目全体の Cronbach の  $\alpha$  係数は.83 と高

い数値であるにもかかわらず、下位因子では、相対的に低い数値になっていた。このことから、KiSS-18 を用いて、中国の高校生の社会的スキルを測定する際には、尺度全体の信頼性は確保できているが、下位因子の信頼性は十分に確保できていないといわざるを得ない。

### まとめと展望

本研究では、中国の大都市の代表の一つである南京市にて、747 名の高校生を対象に、彼らの社会的スキルを調査した。本研究のような規模で中国の都市部における若者の社会的スキルに関する調査がされたことは、極めて少ない。また、本研究は、同じ KiSS-18 を

用いる候(2002, 2003)の研究と異なる調査地域、異なる調査対象者に調査を実施し、候の研究で検討しなかった尺度の信頼性と妥当性を確かめた。具体的に、全体及び各因子のCronbachの $\alpha$ 係数を調べることによって信頼性を確かめ、尺度の中国における平均得点、因子構造、中国の若者の人と関わる価値観との関係を見ることによって妥当性を確かめた。

KiSS-18 が中国で使用される際に、尺度全体に高い信頼性があり、男女差がなく、年齢の上昇につれて得点が上がるなどの点では、菊池(1988, 1994, 2003)の研究結果と一致している。一方、①本研究の平均得点が日本で得た結果より高く、②因子構造が尺度自体

Table 4 因子分析の結果及び他研究との比較

本研究の因子分析結果						候の研究(2002)	
因子と項目(全項目の $\alpha = .83$ )	因子負荷量				共通性	因子と項目	
	因子1	因子2	因子3	因子4			
<b>第1因子: 他人と交際するスキル (<math>\alpha = .70</math>)</b>						<b>第2因子: 課題達成への自己制御力</b>	
2. やってもらうことをうまく指示できるか	.67	.17	-.00	.13	.50	6. 人とのトラブルを上手に処理できるか	
6. 人とのトラブルを上手に処理できるか	.60	.12	.26	.23	.49	8. 気まずい相手と上手に和解できるか	
4. 怒っている相手をうまくだめることができるか	.60	.09	.22	.23	.46	9. やることその順番を決めることができるか	
8. 気まずい相手と上手に和解できるか	.49	.02	.31	.36	.47		
3. 人を助けることを、上手にやれるか	.47	.46	-.13	.04	.45		
1. 会話が途切れない方か	.45	.20	.19	-.13	.30		
<b>第2因子: 自己コントロールスキル (<math>\alpha = .67</math>)</b>						<b>第4因子: 問題解決への処理能力</b>	
12. 仕事上の問題をすぐみつけることができるか	-.01	.63	.03	.35	.51	12. 仕事上の問題をすぐみつけることができるか	
9. やることその順番を決めることができるか	.33	.63	-.13	-.05	.52	14. 矛盾した話に対して、うまく処理できるか	
14. 矛盾した話に対して、うまく処理できるか	.13	.62	.21	.11	.46		
18. 仕事の目標を立てるのに困難を感じない方か	.10	.51	.15	.00	.29		
7. こわさ・恐ろしさをうまく処理できるか	.13	.48	.30	.12	.35		
11. 非難に対するうまい片付けが出来るか	.33	.37	.21	.24	.35		
<b>第3因子: 自己開示スキル (<math>\alpha = .64</math>)</b>						<b>第1因子: 対人接触の柔軟性</b>	
5. 知らない人とすぐ会話が始められるか	.29	-.03	.71	-.06	.60	15. 自己紹介が上手にできるか	
15. 自己紹介が上手にできるか	.16	.19	.65	.22	.53	5. 知らない人とすぐ会話が始められるか	
13. 感情・気持ちを上手に表現できるか	-.09	.40	.58	.18	.54	10. 人の会話に気軽に参加できるか	
10. 人の会話に気軽に参加できるか	.46	.12	.50	-.11	.49	13. 感情・気持ちを上手に表現できるか	
<b>第4因子: 適応スキル (<math>\alpha = .37</math>)</b>						<b>第3因子: 対人トラブルの解決力</b>	
16. 失敗した時すぐに謝ることができるか	.02	.19	.12	.69	.53	16. 失敗した時すぐに謝ることができるか	
17. 人と違った考えを持っていても、うまくやっていますか	.26	.07	-.01	.68	.54	17. 人と違った考えを持っていても、うまくやっていますか	
二乗和 2.49 2.35 2.01 1.51							
因子寄与率 13.86 13.06 11.17 8.38							
累積寄与率 13.86 26.92 38.08 46.46							

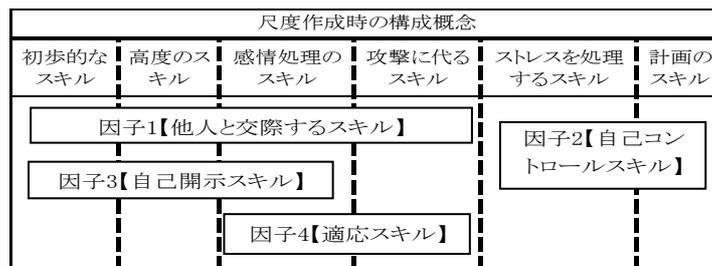


Figure 1 KiSS-18 の構成概念と本研究で得た因子との関係

の当初の構成概念と異なっており、また、③下位尺度の信頼性が相対的に低いという結果が得られた。日本と中国には多くの共通点がある。しかし、これらの相違点を考慮すると、KiSS-18 によって日中で同じ社会的スキルを測定し得るかどうかは不確定だといわざるを得ない。

これまでの中国と日本を比較する多くの研究(天児,2003; 村山, 1995; 中村, 1994; 園田, 2001; 末田, 1995, 1998 など)では、日本人と中国人の行動様式にはある程度の類似性が見出されるが、それ以上に違いが目立つとされ、両国の間に行動を律する規則や考え方、その背景となる慣習や価値観など、多くの異なる点があると指摘されている。例えば、日本人と中国人が人と関わる時、どちらも面子を重視するが、日本人の面子は社会的な立場に関わり、自分と相手の上下関係に呼応することに対して、中国人の面子の概念は自分の経済力、能力、実利実益に関わる(末田, 1995, 1998)。また、日本人は人とつき合う際、より横並びの発想や「田植え思考」を持ち、より他者に気を配り、感情をあまり表に出さないといったような特徴があることに対して、中国人は、より自らの面子を重視したり、自らを中心に物事を考えたり、強烈に自己主張をするなどの傾向がある(天児, 2003)。このように、日本と中国においては、人つき合いに関する概念が類似していても解釈が異なるものが存在し、人つき合いの様式が根本的に異なるものも存在する。本研究で得た日本での結果と異なる点に対する可能な解釈の一つとして、このような日本と中国の両国の相違点が大きく働いているのではないかと考えられる。

以上のようなことを踏まえ、今後、中国と日本の人々の行動様式のさまざまな面を対照しながら、KiSS-18 をもとに、中国に特有の文化を十分考慮した上で、中国人にとって、より高い信頼性と妥当性のある尺度を新たに開発する必要があるのではないかと考えられる。

## 引用文献

- 相川充 1992 大学生における孤独感と自尊心, シャイネス, 社会的スキルとの関係 宮崎大学教育学部紀要(教育科学), 72, 15-26.
- 相川充 2000 人づきあいの技術—社会的スキルの心理学—サイエンス社
- 天児慧 2003 中国とどう付き合うか 日本放送出版協会
- Argyle, M. 1967 *The psychology of interpersonal behavior*. Penguin books.
- 大坊郁夫 1991 非言語的表出性の測定: ACT 尺度の構成 北星学園大学文学部北星論集, 28, 1-12.
- 大坊郁夫 2003 社会的スキル・トレーニングの方法序説: 適応的な対人関係の構築 対人社会心理学研究, 3, 1-8.
- Friedman, H. S., Prince, L. M., Riggio, R. E., & DiMatteo, M. R. 1980 Understanding and Assessing Nonverbal Expressiveness: The Affective Communication Test. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 333-351.
- Goldstein, A. P., Sprafkin, R. P., Gershaw, N. J., & Klein, P. 1986 The adolescent: social skill training through structured learning In Cartledge, G. & Milburn, J. F. (Eds.), *Teaching social skills to children*. Pergamon Press.
- Hall, E. T. 1976 *Beyond culture*. Doubleday & Company, Inc., (岩田慶治・谷泰 訳 1979 文化を超えて TBS プリタニカ)
- 堀毛一也 1987 日本的印象管理様式に関する基礎的検討(1)—社会的スキルとしての人あたりの良さの分析—日本社会心理学会第 28 回発表論文集, 39.
- 堀毛一也 1988 日本的印象管理様式に関する基礎的検討(2)—「人あたりの良さ」と日本的対人関係—日本心理学会第 52 回発表論文集, 254.
- 堀毛一也 1994 社会的スキルを測る 人あたりの良さ尺度 菊池章夫・堀毛一也 編 社会的スキルの心理学 (pp.168-176) 川島書店
- 依田明 1996 一人っ子の心理としつけ あすなろ書房
- 板津裕己 1992 生き方尺度—尺度構成と自己態度との関わりについて カウンセリング研究, 25, 85-93.
- 和泉鉄平・大坊郁夫 1998a 社会的スキルと自己主張に関する研究の課題と展望1 北星学園大学大学院論集, 1, 21-37.
- 和泉鉄平・大坊郁夫 1998b 社会的スキルと自己主張に関する研究の課題と展望2 北星学園大学大学院論集, 2, 1-30.
- 榎野潤 1988 社会的技能研究の統合的アプローチ—SSI の信頼性と妥当性の検討— 関西大学大学院 人間科学—社会学・心理学研究—, 31, 1-16.
- 菊池章夫 1988 思いやりを科学にする 川島書店
- 菊池章夫 1994 社会的スキルを測る KiSS-18 のこと 菊池章夫・堀毛一也 編 社会的スキルの心理学 川島書店, pp.177-183.
- 菊池章夫 2003 社会的スキルを考える 教育と医学, 51, 4-10.
- 菊池章夫 2004 KiSS-18 研究ノート 岩手県立大学社会福祉学部紀要, 6, 41-51.
- 候桂芳 2002 中国における一人っ子大学生の社会的スキル—非一人っ子との比較— 安田女子大学大学院文学研究科紀要, 7, 73-82.
- 候桂芳 2003 中国における一人っ子大学生の社会的スキルと親の養育態度の関係—非一人っ子との比較— 安田女子大学大学院文学研究科紀要, 8, 181-196.
- Lewinsohn, P. M. 1974 A behavioral approach to depression. In R. J. Freedman, & M. M. Katz, (Eds.), *The psychology of depression: Contemporary theory and research*. Winston-Wiley. pp.157-178.
- 村山学 1995 中国人のものさし日本人のものさし 草思社
- 中村晃 2000 自己愛と社会的スキル、および孤独感との関係 日本教育心理学会 42 回総会発表論文集, 558.
- 中村治 1994 日本と中国、ここが違う 徳間書店
- Riggio, R. E. 1986 Assessment of basic social skill. *Journal of Personality and Social Psychology*, 51, 649-660.
- 刘亜麗 1988 加强独生子女个性心理研究 心理学探新, 3, 48-52.
- 佐藤淑子 2003 社会的スキルの日英の比較 教育と医学, 51, 77-85.
- Segrin, C. & Abramson, L. Y. 1994 Negative reactions to depressive behaviors: A communication theories analysis. *Journal of Abnormal Psychology*, 103, 655-668.

園田茂人 2001 中国人の心理と行動 日本放送出版協会  
 末田清子 1995 「面子」の概念の違いとそれによるコミュニケーション・スタイルの違い: 中国人と日本人 ヒューマン・コミュニケーション研究, 23, 1-14.  
 末田清子 1998 中国人学生と日本人学生の「面子」の概念及びコミュニケーション・ストラテジーに関する比較の一事例研究 社会心理学研究, 13, 103-111.  
 Takai, J. & Ota, H. 1994 Assessing Japanese Interpersonal Communication Competence. *Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, 33, 224-236.  
 津村俊充 2002 ラボラトリー・メソッドによる体験学習の社会的スキル向上に及ぼす効果—社会的スキル尺度 KiSS-18 を手がかりにして— アカデミア(人文・社会科学編), 74, 291-320.  
 Triandis, H. C. 1995 *Individualism and collectivism*. Westview Press, Inc., (神山貴弥・藤原武弘 編訳 2002

個人主義と集団主義:2 つのレンズを通して読み解く文化(北大路書房)  
 于魯文 1994 社会技能量表簡介 心理發展与教育, 2, 28-32.

註

- 1)本稿のデータは2002年度に大阪市立大学大学院生活科学研究科に提出した修士論文に基づく。指導教授である畠中宗一先生に感謝する。また、本稿は大阪大学大学院人間科学研究科 大坊郁夫教授の指導の下で作成されたものである。
- 2)本研究の一部は日本社会心理学会第45回大会において報告された。

## Applicability of the Social Skill Scale, KiSS-18 to Chinese Teenagers

Xinhua MAO (*Graduate School of Human Sciences, Osaka University*)

A lot of social skill scales were developed in the U.S. and in Japan. However, there were obtained few in China. Before developing an original social skill scale for the Chinese, we would examine whether the Japanese social skill scale named KiSS-18 can be suitable to Chinese teenagers or not because a lot of similarities exist between Japan and China. Factor analysis was done by using 741 students of senior high school in China, and it was found that the factor structure was different from the composition of the KiSS-18 scale in Japan. In spite of high reliability that we confirmed through the whole scale, those of subscales were not so high. Moreover, average score through the whole scale of the Chinese students is much higher than their Japanese partners. These results suggested that it is uncertain when apply a Japanese social skill scale to Chinese. To increase the validity and reliability, it is necessary to develop an original social skill scale based on Chinese culture and values in the future.

Keywords : social skill, KiSS-18, Chinese, development of scale, comparison of culture

### Appendix KiSS-18 の中国語翻訳

日本語	中国語
1. 他人と話していて、あまり会話がとぎれない方ですか。	1. 你与人交谈时, 对话能不中断地继续吗?
2. 他人にやってもらいたいことを、うまく指示することが出来ますか。	2. 你能用适当的方式拜托别人做事情吗?
3. 他人を助けることを、上手にやれますか。	3. 当你帮助别人时, 你能很出色地完成吗?
4. 相手が怒っているときに、うまくなだめることが出来ますか。	4. 当对方生气时, 你能用适当的方法平息他(她)的怒气吗?
5. 知らない人とも、すぐに会話が始められますか。	5. 与陌生人你也能很快地搭上话吗?
6. まわりの人たちとの間でトラブルが起きても、それを上手に処理できますか。	6. 你能圆满地处理与周围人发生的纠纷吗?
7. こわさや恐ろしさを感じたときに、それをうまく処理できますか。	7. 你能很好地克服害怕或恐惧的心理吗?
8. 気まずいことがあった相手と、上手に和解できますか。	8. 你能跟闹过别扭的人很好地和解吗?
9. 仕事をするとき、何をどうやらよいか決められますか。	9. 做事情时, 你能知道该做什么, 怎么去做吗?
10. 他人が話しているところに、気軽に参加できますか。	10. 别人交谈时, 你能很自然地加入进去吗?
11. 相手から非難されたときにも、それをうまく片付けることが出来ますか。	11. 被别人谴责时, 你能很好地应对吗?
12. 仕事の上で、どこに問題があるかすぐに見つけることが出来ますか。	12. 你能及时发现工作中存在的问题吗?
13. 自分の感情や気持ちを、素直に表現できますか。	13. 你能坦率地表达自己的情感和心情吗?
14. あちこちから矛盾した話が伝わってきても、うまく処理できますか。	14. 对于从各方面传来的相互矛盾的说法, 你能很好地进行辨别吗?
15. 初対面の人に、自己紹介が上手に出来ますか。	15. 你能很好地向初次见面的人做自我介绍吗?
16. 何か失敗したときに、すぐに謝ることが出来ますか。	16. 当你出现了失误时, 能马上承认吗?
17. まわりの人たちが自分とは違った考えを持っていても、うまくやっていけますか。	17. 即使别人的想法与你不一致, 你也能与其很好地相处吗?
18. 仕事の目標を立てるのに、あまり困難を感じない方ですか。	18. 你能很轻松地给自己订立某项目标吗?